

# 〈浪漫主義〉と『萬葉集』

——保田與重郎『萬葉集の精神』をめぐって〈戦争と萬葉集〉——

小松（小川）靖彦

## 一 保田與重郎の萬葉論の力

日中戦争（「支那事变」）・太平洋戦争（「大東亜戦争」）下、政府・「国文学者」・文学者・思想家・教育者、さらに軍や新聞・ラジオによつて「萬葉精神」が宣揚された。その多くは、身を捧げて天皇に仕え、勇猛果敢に「国」を護ることを、無媒介に「国民」に求めるものであった。

その中で、「国文学者」は、『萬葉集』の歌を具体的に踏まえながら、〈他者〉（「国家」を中心とする）に対する切実な〈情〉である〈まこと〉（久松潜一）や、「国家への忠誠」「君国への奉仕」を旨とする「国民精神」（武田祐吉）を、「萬葉精神」として説明しようとした。「国文学者」の萬葉論は論理性や学問的裏付けを志向するものであったが、『萬葉集』の歌に表れた天皇への忠節を、直ちに萬葉時代の「国民」一般の精神に敷衍するという飛躍があり、さら

にその修養を戦争下の「国民」に求めるという〈道德〉的性格の強いものであった。<sup>1)</sup>

これらに対して、中河與一・保田與重郎は、西洋近代に抗しながら、「崇高なもの」を強く憧憬する〈浪漫主義〉の立場からの「萬葉精神」論（中河）・「萬葉集の精神」論（保田）を展開した。中河・保田の萬葉論は、一九三〇年代初頭に始まる政治的・経済的閉塞感の中にあつて、〈道德〉的萬葉論では満たされない知識人とその予備軍の心を捉えた。<sup>2)</sup>

特に、『萬葉集の精神』（筑摩書房、一九四七・六）にまとめられた保田の萬葉論は、中河よりも激しく近代文明を全面否定しながら、詩の本質論と文明史観に立脚して、立体的で強固な論理を組み上げ、時代に同調できない知識人とその予備軍に強く訴えかけるものであった。例えば、竹内好（当時三十二歳）は、「僕らの周囲に充滿してゐる非現代的なもの、世俗的なもの、口頭禪的な文化的なもの、否定を媒介せぬ肯定、行為を抽象した觀念、非歴史的な契機を含みぬ

歴史主義、要するに墮落した文章とそれを墮落と感ぜぬ精神」<sup>3</sup>に抗する態度を表明した中野重治『斎藤茂吉ノート』（筑摩書房、一九四一・五）と保田『萬葉集の精神』によって、自分もその道をとる決意を固めている。<sup>4</sup>

さらに、『萬葉集の精神』は、悲劇的な運命のもと、それを知りながら『萬葉集』の詩人たちが希望を持ち続けた強靱さを、時代に對する強い危機感を持つて説いている。それは、戦場に行かねばならぬ、知識人の予備軍である大学生・旧制高等学校生など、若い「學貴族」<sup>5</sup>たちの感情の深いところに共感を呼び起こすものであったろう。<sup>6</sup>

『萬葉集の精神』は内容においても影響力においても強い力を具えたものである。しかし、これを專一的に論じた評論・研究は極僅かである。その理由は、日中戦争・太平洋戦争下、絞り込めば、『後鳥羽院』（思潮社、一九三九・一〇）刊行より後の保田の著作を、イデオロギー的で受け入れ難いとした一九六〇年代の捉え方が、保田與重郎論の枠組みとなってきたからである。<sup>7</sup>しかし、『萬葉集の精神』は、『後鳥羽院』までの古典論からの転回が認められるものの、<sup>8</sup>その集大成という性格も持っている。

また別の理由として、北山茂夫が歴史学の立場から『萬葉集の精神』を激しく批判したことも挙げられる。北山は、本来廷臣である柿本人麻呂・大伴家持を「草莽」、すなわち「民」として性格付け、

彼らの大君信仰を「民族」にまで敷衍したことを、奈良時代の社会制度の実態から離れた、「歴史の贗造」と非難した。その苛烈さは、後の研究者を『萬葉集の精神』から遠ざけることになった。

しかし、北山が『萬葉集の精神』を、保田の「思想上の到達点」と的確に捉えたように、保田の「萬葉集の精神」論はあくまでも（思想）であり、（歴史的事実）をいくら突き付けても、それらは容易に跳ね返し得るのである。保田が『萬葉集の精神』で論じたのは、『日本書紀』『続日本紀』に記録された（歴史的事実）ではなく、（歴史の精神）であった。『萬葉集の精神』を真に批判するためには、（思想）という同じ次元で議論がなされなければならない。

さらに、『萬葉集の精神』は刊行時より、〈政治と文学〉という枠組みを通して読まれてきた。この常識が、『萬葉集の精神』の印象を決定し、研究をやや手薄にしてきたように思われる。『萬葉集の精神』刊行の半年後の『国語と国文学』誌掲載の書評で、風巻景次郎は、保田の論の主旨を次のように要約した。<sup>9</sup>

……危機感に迫られ、「在朝頭要の指導的立場」における時務の宜しきを見得ないとき、はじめて「在野草莽の微臣の鬱憤の述志」となる。

政治を主導する立場にある者がその時に応じた務めを果たしていない時に、心中にわだかまりを持った在野の民の悲願の表現が文学である、とまとめたのである。そして、風巻はこれを保田の大伴家持

像の説明に応用する。

……大伴家持はかくて、藤原氏専権の伸びゆくときにあつて、古い伝統を護持しつつ窮地に墜ちつつあつた旧名族の一つを代表する危機の英雄である。内訌はしばしば生じて、その度に大伴氏の一族は脱落し、朝勘を蒙る。そうした中にあつて「在朝顕要」の藤氏に対立しつつ、みずからの誇りと大君への忠誠とに生きている。

この「藤原氏の専横に政治的に敗北した大伴家持の述志」という捉え方は、実は保田の家持論の中心的な論点ではない。むしろ、当時の「国文学」における家持像に外ならない。<sup>(1)</sup> 保田が描こうとしていたのは、藤原氏が領導する新文明に対する、固有文明の側に立つ家持の危機感であつた。<sup>(2)</sup> そもそも、『在朝顕要の指導的立場』における時務の宜しきを見得ない<sup>(3)</sup>ことは、「草莽微臣の薨情の述志」の一因に留まるのである。

このような「政治的権力者の専横に対する敗北者の文学的抵抗」という通俗的理解が行われたために、戦争下において、陸軍報道部から、『萬葉集の精神』は「軍部に批判的な」<sup>(4)</sup>書物と見られたのである。そして、戦後には、この理解によつて、保田は政府・軍への抵抗者というイメージを与えられるのである。『萬葉集の精神』を正面から論じた数少ない評論である山城むつみ「万葉集の『精神』について」も、保田の文章中のためらいに鋭く注意を向けながら、

それらに戦争を遂行しようとする東條英機ら軍に対する、密かな「精神」のテロリズムへの志向を読み込んでしまっている。<sup>(5)</sup>

今日、何よりもまず必要なことは、『萬葉集の精神』全体の〈思想〉を、同時代の『萬葉集』受容と比較しつつ正確に把握することである。それを通じて、『萬葉集の精神』が、保田の意図とは異なる読み方を生み出してしまふ機制も明らかにするであろう。

その上で、この保田の〈思想〉に、現代においてどう向き合うかを模索しなくてはならない。『萬葉集の精神』が単にイデオロギック・反動精神的な萬葉論であれば、批判は容易である。しかし、『萬葉集の精神』には現代においてもなお、『萬葉集』の理解を深める見解も提示されているのである。また、近現代の「日本人」の〈感情の論理〉に未だに強く訴える力も持ち続けている。

## II 「書物」としての『萬葉集の精神』

保田與重郎（一九一〇〈明治四十三〉～一九八二〈昭和五十六〉）の『萬葉集の精神』は、一九四二年（昭和十七）六月十五日、筑摩書房刊（本稿では「初版本」と称す）。A5判、丸背溝付き上製本、継ぎ表紙（平は和紙〈素紙〉、背は薄茶色平織布<sup>ひらおり</sup>）、口絵六頁、五八五頁（他に奥付裏広告一頁）、函入り（貼り函）、定価五円二十銭、発行部数無記載。同年十一月三日再版（本稿では「再版本」と称す）。判型・装

丁・定価は初版本と同じ。頁数は、初版本の奥付裏広告が白頁となっている以外、初版本と同じ。本文用紙の質が初版本に比べて著しく劣る。函は未確認。発行部数二、八〇〇部。

初版本・再版本ともに、函・扉・中扉の書名が「萬葉集の精神——その成立と大伴家持——」であるのに対して、背文字・奥付には「萬葉集の精神」とのみある。本稿では「萬葉集の精神」を書名として論述を進めたい。

函に入った初版本は、戦前の岩波書店や明治書院刊の「国文学」の研究書を思わせる重厚な姿を見せる。しかし、その本体は、研究書にはない温かみと清浄さを感じさせる装丁となっている。五か月後に、二、八〇〇部もの再版ということは、この時代の研究書の規模をはるかに上回るものである。

再版本は初版本の版をそのまま用いているが、『全集』第十五巻の谷崎昭男「解題」によれば、初版本の誤り九十六箇所を訂正している。しかし、私の気付いたそれ以外の誤植で未訂正のものもある。

一九七一年十一月、講談社刊の『保田與重郎選集』第三巻に収められた『萬葉集の精神』は、谷崎「解題」によれば、底本が再版本で、しかも著者による補訂も加えられている。さらに『全集』第十二巻所収の『萬葉集の精神』は選集を底本とし、再版本その他を参考して校訂したものである。戦争下の保田の〈思想〉を捉えるためには、まず初版本（再版本も参照しつつ）に拠るべきである。

初版本は、書き下ろしの章・節もあるが、『文藝世紀』『コギト』などの雑誌掲載稿をもととしている。谷崎「解題」が出典を示すが、初出稿は「大伴家持」〔『文藝世紀』昭和十六年一月号〕に始まり、「防人の歌」〔『コギト』昭和十六年十一月号〕に至るまでの間に集中的に書かれた萬葉論である。<sup>75</sup>『海行かば』の歌について〔『文藝日本』昭和十七年五月号〕のみがやや離れた時期のものになる。保田は『萬葉集の精神』の執筆時期について、「昭和十七年三月二十五日」付の「序」に次のように記している（頁数は初版本。以下同）。

萬葉集への関心は、我らの場合は、最も早い少年時代と共に始つたものであるが、本書の執筆を志したのは、去る二千六百年祭（引用注、一九四〇年〔昭和十五年〕十一月十日）に當つてであつた。ほど一年にして昨年（引用注、一九四一年）十月の頃に稿を終り、その後半歳を校正に従事したものである。（五頁）

皇紀二千六百年祭を機に、『萬葉集』に関する一部の「書物」を造ることを構想し、それに従つて、矢継ぎ早に雑誌に論考を発表し、それが一段落した一九四一年十月以後に、『萬葉集の精神』としての組織化を図つたという過程が推定される。

『萬葉集の精神』執筆の機縁は皇紀二千六百年祭であつたが、保田はさらにこれについて「序」で次のように述べる（傍線は引用者。以下同）。

なほ本書はわが国未曾有の危機の日に稿をなし、その日とはやゝ趣の異なる未曾有の時代に上梓されるのである。我らの思想は、古典の精神に立つ故に、昭和十六年十二月八日以前も、今も、原理に異なるものはないが、生身の歓喜と慟哭のあらはれは心懷一変する程のものを思ふ。(六頁)

保田は皇紀二千六百年祭を「わが国未曾有の危機の日」と捉えていた。太平洋戦争（「大東亜戦争」）開戦後の緒戦勝利に沸き立っていた時期から遡つての見方であるだけに、ある程度差し引いて考える必要があるが、確かに保田は皇紀二千六百年祭に対して、これに素朴に感激した文学者たちとは異なる特別な感懷を抱いていた。

保田は皇紀二千六百年の紀元節（二月十一日）の時期に「国民としての思考よりももとと原初的情緒」を感じて故郷大和に帰り、橿原神宮の新造された宮殿に参詣し、そのきららかさ、雄大さに「建国の始め」の美についての啓示を得ている（「皇紀二千六百年の紀元節」<sup>18</sup>）。そして、「紀元二千六百年」<sup>19</sup>の表題の別の文章で、皇紀二千六百年という年について、次のように論評する。

紀元二千六百年は予期された如くに、異常な年であつた。国内外の状況も一変したのである。さうして二千六百一年の今年は、ことみなの新しくなる第一歩の日であらう。

「紀元二千六百年」前後に発表された文章によれば、保田は、この年六月に近衛文麿首相の主導で始まった新体制運動に協力する文

学者たちの喧噪を、戦時下の国民生活の犠牲の上に成立していることを忘れたものと批判する一方で、<sup>18</sup>九月の日独伊三国同盟調印を受けて、ドイツ・イタリアに対して日本の審美觀を主張する必要を説いている。<sup>19</sup>「異常な年」とは、このような状況を指しているのであらう。その中における文学者のあるべき姿を、保田は次のように説く。

我々は、文学者はかういふ日にどういふことをすべきであるかといふことをくりかへし口にしたのであるが、もはや国家と民族の長い歴史が我々に要求してゐることは、至誠を以て平生の志をなすといふことになつてゐる。我々は何も云はず何も描かないでゐても、なほ十分な詩人として千古の人々に対し得る確信の上で、たゞかりそめの文章を草してをればよいと思ふ。

保田は、皇紀二千六百年祭において、「建国の始め」に激しい感動を覚えると同時に、「国ぶりの文明」<sup>20</sup>が国内的にも対外的にも危機的状況にあると認識し、大君への至誠の志を平生のこととして淡々と述べてゆくことが文学者の務めであると決意したのであらう。その具体的内容が『萬葉集の精神』の執筆であつたのである。この本の末尾近くでは、「二千六百年の詩人が、臣子の畏怖の情の悲壮さに於て、国の文藝に携つてゐたという志は若干後代の者に示すに足ると信ずる」（運命 五六頁）と記している。

保田は、「その日とはやゝ趣の異なる未曾有の時代」、すなわち太平洋戦争開戦後であっても、開戦前と「原理に異なるものはない」と言う。それは、保田が、戦争という時局ではなく、「国ぶりの文明」の衰退という根源的なものに危機感を抱いていたからであろう。しかし、保田は「生身の歓喜と慟哭のあらはれは心懷一変する程のものを思ふ」と、アメリカ・イギリスとの開戦が激しい感情を呼び起こし、心中の思いを一変させたことも認めている。

河田和子によれば、『萬葉集の精神』の中心的思想である「皇神の道義」と「言霊の風雅」は初出稿に見えず、保田は初版本を組織立てる際、この二語を鍵語に大幅な加筆を行った。<sup>②</sup>太平洋戦争開戦によって、保田は「皇神の道義」と「言霊の風雅」を基軸に、「萬葉集の精神」論を、「危機の思想」として組織化したのであろう。

### 三 『萬葉集の精神』の主旨

『萬葉集の精神』の文章は、章が進むに連れて論理が展開してゆくという形をとらない。論じる対象は、

- ① 『萬葉集』（「萬葉集と家持」）
- ② 柿本人麻呂（「慟哭の悲歌」「嗚咽の哀歌」「言霊の風雅」）
- ③ 人麻呂と大伴家持の間（「時代」）
- ④ 家持（「少年期」）

⑤ 大伴旅人（「家庭と文化」）

⑥ 家持（「青年」「時代」）「回想と自覚」

⑦ 家持と平城天皇（「運命」）

と変化してゆくが、保田はそれぞれにおいて、基本的に同じ主張を繰り返す。章を追って論旨を要約するのではなく、その同じ主張を整理することが、『萬葉集の精神』の「思想」を捉えるための有効な方法となる。

また、『萬葉集の精神』において、保田は、文明開化、その世俗的文化観、その本質たる科学、その産物である自然主義文学、さらに萬葉学に関しては、アララギ調美学・文明開化以降の国文学・文藝学、そして鑑賞主義などを激しく否定し、国学の精神の復興を訴える言葉を、しばしば文章の間に差し挟んでいる。これらは保田の、時代にたいする危機意識をダイレクトに表現するものであり、刊行当時、読者に大きな衝撃を与えたものである。<sup>③</sup>しかし、本稿ではこれらを『萬葉集の精神』の重要な柱の一つと押さえつつも深くは踏み込まず、保田のポジティブな萬葉論を検討したい。強烈な批判の身振りよりも、ポジティブな論理構成の中に、保田の論の力が蔵されているように思われるからである。

その要点を私なりに整理すると以下のようになる。

- (1) 『萬葉集』を始めとする古典は、「皇神の道義」が「言霊の風雅」に現れたものである。

(2) 「萬葉集の精神」とは、『萬葉集』という大歌集を生み出した意志のことを言う。

(3) 「萬葉集の精神」とは、国家の危機の中で、〈草莽〉として〈歴史の精神〉を護り、示そうとする〈志〉である。

(4) 「萬葉集の精神」は、①神の如き柿本人麻呂が慟哭によって皇国の精神を示し、②それを人間的に意識した大伴家持が人為的に〈大君の思想〉を造り上げるという二段階を経て完成した。

(5) 『萬葉集』を考察する目的は、危機の日を生きる我々の〈道〉をつよくすることにある。

以下、これらの要点に沿って保田の萬葉論の検討を進める。

#### 四 「皇神の道義」と「言靈の風雅」

(1) 『萬葉集』を始めとする古典は、「皇神の道義」が「言靈の風雅」に現れたものである。

この主張は、『萬葉集の精神』の〈思想〉の根幹をなすものである。しかし、保田は「皇神の道義」と「言靈の風雅」の二語について明確な定義はしていない。それは、この二語に拠った鹿持雅澄の古学を受け継ぐ立場を取っているためである。保田は雅澄『萬葉集古義』『総論其三』の「古学」の一節、

「余が萬葉集をよく／＼よみあぢはひて、一には皇神の道義をきはめ、一には言靈の風雅をしたへと常にいふは、ことに所見ありていふことなれば、今くはしくわきまへむ」(「鳴咽の哀歌」七八頁)

を引用し、近世の『萬葉集』の学問の精神はこれに尽きるとする。「古学」のこれに続く文章によれば、「皇神の道義」は、神代から今に至るまで定まっている君臣の別を弁える、皇朝固有の倫理(「君臣の大義」)を言う。まことの神であり、そして礼の限りを尽くして皇祖神を祀る天皇を敬うことが、神の恩恵に与る全ての臣民の踏み行うべき道とするのである。

一方、「言靈の風雅」については、「古学」では十分な説明はなされていないが、後世の外来語の影響を受けていない神代の古語をさすと見られる。五味智英によれば、『萬葉集古義』以外の雅澄の著作も視野に入れると、我が国の古代言語が、言語にこもる神秘的なものである「言靈」によって、音声・意味・言葉のつづけがら・歌の体格が正しく整っていることを言う。<sup>(2)</sup>

また、「皇神の道義」と「言靈の風雅」の関係について、保田は「古学」の「さてその皇神の道は、言靈のさきはひによりてうかゞふべく」の一節を引く(七八頁)。《皇神の道義が言靈の風雅に現れる》という保田のテーゼは、この一節に基づいている。

北山茂夫は、雅澄は二者の一致を説いておらず、保田がこれらを

結び付けたとする。<sup>205</sup> 河田和子も同じ認識に立ち、保田の依拠したのは、雅澄が二者を意識的に統一したと解釈する久松潜一『国学——その成立と国文学の関係——』(至文堂、一九四一・三)であったとする。<sup>206</sup> しかし、五味は雅澄の著作の詳細な検討によつて、「皇神の御口づから」のものであるから、「言霊」が靈妙神秘な働きをする——すなわち、「言霊の風雅」があつてこそ初めて「皇神の道義」が窺われる、と雅澄が考えていたことを明らかにしている。<sup>207</sup> 二者を結び付けることは、必ずしも久松と保田の強引な解釈とは言えないのである。

とはいえ、『萬葉集の精神』における「皇神の道義」「言霊の風雅」のそれぞれの意味、および関係は、雅澄の考え方の外に踏み出している。それが最もよく表われているのが次の一節である。

……言霊の風雅といふ考へ方は、もつとも深い人心にある自然なもの、すべてのものの生れる源の道の姿の現れたものを云ふ考へ方である。皇神の道義を説いて与へるといふ思想より深い考へ方が、この集に描かれてゐるのである。しかも萬葉集の歌は、自然にして神のをしへをふみ得た者の、神ながらの善言美辞を集めたのみでなく、人為懸命の努力によつて、神に近づき神を自己の内に祝つた者の、創造的世界観の具体化を美として描き出したのである。即ち美しい文化をしたふ心によつて、皇神の道義は描かれたのであつた。(「回想と自覚」三九二頁)

『萬葉集の精神』において、保田は「皇神の道義」を、基本的に雅澄の言う「君臣の大義」の意味で用いているが、この一節では、それを「もつとも深い人心にある自然なもの」、「すべてのものの生れる源の道」としている。(「創造」)をもたらす、あるがままの心のあり方が、「皇神の道義」なのである。それはこの一節の少し先にある、「人の心に移る神を明らかに、神を心に祝はんとする人の思ひをうつす」(三九三頁)も参考にするならば、神と人とが一体になる境地でもある。

一方、「言霊の風雅」も、雅澄の考えた、古代言語が正しく整っているさまではなく、神のままに現れた〈美〉、また、懸命な人爲的努力によつて得られた〈美〉を言う。保田は『萬葉集の精神』において、「言霊の風雅」については、一貫してこの意味で用いている。その捉え方は、「言語に即しての美」とする久松潜一の解釈<sup>208</sup>に近く抽象的である。

さらに、雅澄にあつては、「言霊の風雅」は「皇神の道義」をさぐる道であるという受動的な性格が強かったのに対して、保田は、「言霊の風雅」を、「皇神の道義」を発現する、能動的なものと考えている。

しかし、保田はこのような〈創造〉としての「皇神の道義」と「言霊の風雅」を、雅澄の考え方とは別物とは思っていない。人間に詩をもたらす人智を超えた力も「神」であり、皇祖神とその神裔であ

る天皇もまた「神」であり一体なのである。

《創造》をもたらす「神」については、フリードリヒ・グンドルフ Friedrich Gundolf や富士谷御杖の影響を受けながら、『後鳥羽院』をさらに遡る早い段階から、保田が追究してきたテーマであつた<sup>(29)</sup>。

それゆえ、保田が、詩の創造原理を思索する中で、日本の文藝に貫流するものを求めて、文学を萬世一系の天皇観に引き付けたとする河田の捉え方が肯綮に当たる。そして、河田は、保田が「皇神の道義」と「言霊の風雅」に《創造》という意味も与えたことの理由を、ヨーロッパのルネサンスに匹敵するとともに、それとは異なる《文藝復興》を成し遂げることをめざしたためと説明する<sup>(30)</sup>。

付け加えるならば、その《文藝復興》は文学者や文化人の範囲に止まるものではなく、「今日に要求されることは、救国の詩が、国の詩として、国中の津々浦々より生れ、やがてそれが国全体を一樣につつま込むことである」（『慟哭の悲歌』二四頁）とあるように、「国民」、すなわち、保田によれば、皇別の子孫または外戚の後裔で天皇と血筋の繋がりのある「みたみ」（同三八頁）による《文藝復興》を強く求めていたことを私は強調したい。

さらに言えば、保田は「皇神の道義」を、幕末などのような歴史の危機的局面を強靱に生き抜く精神であり、心ある人々の支えとなるものと考えていたことも注目される（波線は引用者。以下同）。

a ……しかし皇神の道義が、なほ臣の心情の中にあることの反

省は、生きてゐる志士の精神が無力無援の中にあつて、しかも火と燃ゆる絶大の信念の自覚とその行為があつたゆゑに、我々の精神に回想されたものである。（『鳴咽の哀歌』八一頁）

b ……しかも彼ら（引用注、先代の国学者）が皇神の道義と云つたときは、今日の時局日本主義派の如くに、萬葉集の中から国家精神を讀へる美辞をたゞ抽象化するといつたことを決してしてゐない。彼らは史実の暗黒面にあくまで忠実であつた上で、よく国民精神の本質の不動の深さをひき出してゐるのである。

（『青年』二五二頁）

前節で見たように、保田は独自の見方に立つて、皇紀二千六百年祭の日を「わが国未曾有の危機の日」と捉え、さらに太平洋戦争開戦後を「その日とはやゝ趣の異なる未曾有の時代」とした。その《危機》の中で、「神」である天皇に対する自然な崇敬の心持ちが、そのまま詩の《創造》となる新しい時代が到来することを保田は切望したのである<sup>(31)</sup>。

## 五 「萬葉集の精神」と《歴史の精神》

(2) 「萬葉集の精神」とは、『萬葉集』という大歌集を生み出した意志のことを言う。

戦争下の「萬葉精神」論の中で、保田の萬葉論を際立たせているのが、この主張である。保田以外の「萬葉精神」論は、『萬葉集』の歌から「萬葉精神」を導き出すものであり、『萬葉集』という歌集そのものを生み出した意志を論じる視点は欠けていた。保田がこの主張を強く打ち出しているのが次の一節である。

しかし家持が何を考へ、何にひかれて、かゝる萬代の集を編まうと志したか、そのことについて、単なる文藝の進歩とか、表現意欲の向上といった、当時の人を軽蔑する如き児童の文藝論をなす代りに、さういふ萬葉集成立の意欲となつたものを、萬葉集の表す全体としての思想や歴史の精神から考へ、萬葉集精神の成立の真義を云ふことによつて、家持のその時の思想を古典に於ける文藝の志と機能の民族的表現として眺め、これを明らかにしたいと思ふ。(回想と自覚「三七七頁」)

この『萬葉集』全体の表す思想や精神を考える視点を得るきっかけとなつたのが、大伴家持を『萬葉集』撰者とする契沖の説である。保田は、契沖が単に客観的証拠によつてというより、「皇国の文学」とはかくあるという(志)に従つて、家持を通じて、『萬葉集』を生み出した歴史と古典の精神を見ようとして家持撰者説を立てたと解釈したのである(鳴咽の哀歌「八四〇八五頁」)。

この視点は、一九三七年(昭和十二年)六月の「萬葉精神の再吟味―古典復興の現代的意義―」<sup>(32)</sup>、や一九三九年五月の「萬葉集の

鑑賞」<sup>(33)</sup>にはまだ見られない。保田がこれを得たのは、『萬葉集の精神』のもととなる最初の雑誌掲載稿が出る少し前の一九四〇年十二月に出版された『短歌文学講座』第三巻に収録された「百人一首」<sup>(34)</sup>においてである。やはり契沖の『百人一首改観抄』がきっかけとなつている。これを読むことで、「初めてわが国の歌の心と志の何であつたかを、一つの歴史として知つた」という(「」は後の加筆)。

百人一首は 天智天皇 持統天皇に始まり、後鳥羽院と順徳天皇で終つてゐる。これはわが個有の宮廷「文化の中」に大陸の文明が入り、「その相剋の日を経験したのち」、宮廷の唯美主義が「日本の姿で」建設された日から、その唯美生活が渺々たる美の象徴をきづきあげて崩壊するまでの期間である。

このように文明の歴史を『百人一首』に認め、それがわかるように巧みに編輯された「この集の全体の意味」を重視するのである。この「百人一首」には、歌集全体の思想や精神を考える視点のみならず、『萬葉集の精神』の発想の芽の一つも簡略に示されている。「わが宮廷と国家の整備に當つて最も意味ふかつた時代」である天武朝の時代の大倭宮廷詩人が、「何故に一せいにあの悲歌と慟哭をうたひあげたのであつたか」と問いかけているのである。

『百人一首』という小規模な秀歌撰での一種の「演習」の成果を踏まえて、大部な『萬葉集』全体に立ち向かつたと見ることもできる。但し、『萬葉集の精神』では、「百人一首」には見えない考え方

も示されている。

……即ち萬葉集を作り、あるひはこの集の根幹となつた家集をつくらうとした、一般的な歴史と古典の精神と意志を、家持といふ個性によつてあらはしたものであつた。（鳴咽の哀歌）

八五頁）

『萬葉集』を生み出したものは、その撰者である家持個人の意志ではなく、その背後にある抽象的な、大いなる存在の意志と見たのである。

(3) 「萬葉集の精神」とは、国家の危機の中で、〈草莽〉として〈歴史の精神〉を護り、示そうとする〈志〉である。

『萬葉集の精神』の中で最もわかりにくい用語の一つが〈歴史の精神〉である。保田は『萬葉集』の詩人たちが危機の中でこれを護持したことから、『萬葉集』がこれを示そうとしていることを繰り返して主張する。

この〈歴史の精神〉という用語は、岡倉天心の *The Awakening of Japan* 「日本の目覚め」<sup>(36)</sup> で用いられた *the historical spirit* の翻訳語であると思われる。天心は、*The Voice from Within* 「内からの声」の章で、十八世紀末に国学により歴史知識が獲得されたことで神道が復活し、日本民族の先祖伝来の理想である質朴誠実の厳守、

御門に授けられている先祖伝来の統治への服従、神聖な岸に外敵が足を踏み入れたことのない先祖伝来の国土への献身を教え、インド・中国を理想として盲従することから脱却し、自己に拠るべきことを求め、その *the historical spirit* が文学・美術・宗教に浸透して侍の心に届き、やがて *the historical spirit* は剣を持って立ち上がり、侍たちに王政復古を実現させた、と幕末維新の歴史を「内からの声」によるものとして描いた。天心の *the historical spirit* は、先祖が受け継いできた日本民族本来の倫理に従う熱情と強い自立心を表している<sup>(37)</sup>。

浅野晃は一九四〇年十一月十五日（皇紀二千六百年祝賀行事最終日の翌日）、黄河書院刊の評論集を「歴史の精神」と名付け、その巻頭の「アジアの朝」で天心の *The Awakening of Japan* を紹介し、*the historical spirit* を「歴史の精神」という言葉に訳している。この文章全体を読むと、浅野は〈歴史の精神〉を、「自分自身の切なる歴史的回想」によって自己の更生の種子を求めること、と解釈しているように見える。

さらに浅野は、一九四一年一月に「歴史の精神」という題で講演をしている。ここでは〈歴史の精神〉を、様々に言葉を換えて説明しているが、要は、「自分自身の切なる歴史的回想」を日本に即し、歴史を生き抜いてきた、古典の示した歴史像——具体的には、『古事記』『日本書紀』の記す「神勅」による萬世一系の天皇による統

治と、その天皇を過去・現在・未来に慕う臣民の心——を〈歴史の精神〉と捉えているとまとめられる。

この講演の記録が出版されるのは、一九四四年五月、日本文林社刊の『遠征前夜』においてであり、保田が『萬葉集の精神』執筆の時点で、この講演録を読むことができたかは不明である。しかし、この浅野の〈歴史の精神〉は、保田の〈歴史の精神〉と重なるところが多い。

保田は、戦後に出版した『萬葉集名歌選釈』<sup>(37)</sup>の「概説」では、『萬葉集の精神』の〈歴史の精神〉に当たる言葉を、全て「歴史の信実」に置き換えている。変化してゆく現象を記録した「歴史」ではなく、あるべき本当の歴史を、保田は〈歴史の精神〉と考えていたのである。そして、その〈歴史の精神〉は、保田が「永遠な国史といはれる歴史の精神」（回想と自覚 四九七頁）と記したように、永遠不変のものである。〈歴史の精神〉という言葉は、その永遠不変のものが「歴史」の中を脈々と生き続けることを表すのであろう。

さらに、保田は「幸ひなことに、我国では古典の精神がそのまゝに歴史の精神であり、又今日の精神であり、萬世に国に伝はるべき明日の精神である」（「青年」二七九―二八〇頁）と言ひ、古典に〈歴史の精神〉を求めている。

ここまでは、保田の〈歴史の精神〉は浅野の〈歴史の精神〉と重なる。しかし、古典に〈歴史の精神〉を求めるにしても、保田は、

浅野のように『古事記』『日本書紀』の神勅に直接行くことはしない。<sup>(38)</sup>さらに、数少ないながらも、保田が〈歴史の精神〉の内容を説明した箇所が、『萬葉集の精神』にはある。

さゝなみの志賀の大曲<sup>オホマカ</sup>淀むともむかしの人にまたもあはめやも  
(巻一・三一、柿本人麻呂)

古<sup>コ</sup>の人に我あれやさゝなみの古き都を見れば悲しき

(巻一・三二、高市黒人)

保田は、これら近江旧都を嘆く歌の「むかしの人」「古の人」は、単にかつて近江京にいた人のことをいうのではなく、「我が国の神ながらの歴史の精神」をさすものと解釈し、その〈歴史の精神〉とは「日本の神の心と人間の体がまだ離れてゐない状態を生きた精神」とする（「慟哭の悲歌」三六頁）。『萬葉集』の歌において切望された、「神」と人とが一体であつた時代の精神が、保田の〈歴史の精神〉なのである。

そして、この「神」は、「皇神の道義」同様に、「神」である天皇と結び付く。それを示しているのが次の一節である。

……文明の進歩と頽廢は否定し得ない。我々はさういふ状態に於て、なほよく歴史を支へ、精神を再建するものを眺める必要があつたのである。しかもさういふ原動としての古典の精神は、我国では、歴史の精神と、神の創造の境地に於て同一であつた。それは永遠にしてしかも瞬間であつた、過去と

現在に切断はなかつた。萬世一系の思想は、わが神の思想であつた。それは今日世界に於けるあらゆる思想の中で、最も明確に確立する思想として唯一のものである。(『青年』二八四頁)

この一節は、『萬葉集の精神』の中でも特に詩的で難解である。

家持についての、「彼は深い回想と激しい反省によつて、大君のまに／＼、即ち神のまに／＼、初めていのち安らかな国がらを思ひ定めた」(『慟哭の悲歌』二五頁)を参考にするならば、(『古典の精神』

Ⅱ「歴史の精神」とは、「神」と人が一体の、永遠のものであるとともに瞬間に全てをかける(39)「創造」の精神であり、同時にその「神」は萬世一系の天皇である、ということであろう。保田の「歴史の精神」は、「創造」の精神と一体の萬世一系の思想なのである。

この点で「歴史の精神」は「皇神の道義」とほぼ近い内容と言える。但し、「歴史の精神」には、「回想と自覚」(『萬葉集の精神』の章題)や、「歴史」の変化に媒介された永遠性が強く意識されている。

(4) 「萬葉集の精神」は、①神の如き柿本人麻呂が慟哭によつて皇国の精神を示し、②それを人間的に意識した大伴家持が人為的に「大君の思想」を造り上げるといふ二段階を経て完成した。

この主張において、特に注目したいのは、家持が「大君の思想」を造り上げる過程についての保田の説明である。もはや「神」のよ

うに歌うことのできない家持は、大伴氏の歴史を回想し、大伴氏の氏上としての地位の重さを自覚し、懸命の努力によつて、安積親王挽歌(巻三・四七五〜四八〇)、「賀陸奥国出金詔書歌一首」(巻十八・四〇九四〜四〇九七)を制作し、「大君の思想」を造り上げたとする。そして、それは、奈良時代中期から藤原氏の主導によつて隆盛する外来文明から、固有文明を守ることであつた。

i ……天孫降臨以来の名家にして建国功勞の第一人者として、その他の著名の神別貴族も、その血統と功績に於て、大伴氏に及ぶ者は一人としてなかつたのである。(『回想と自覚』四一八頁)

ii ……彼は慟哭するやうに、遠つ神祖以来の歴史を歌ひ、大君の思想をうちたてた人である。それは皇国の臣として唯一最大の名門のもつた思想である。(『回想と自覚』四四八頁)

このように、保田は「大君の思想」を、名門の家持であつたからこそ造り上げることができたと言う。

同時代の「国文学者」も、天皇への忠誠を述べた家持の歌に注目している。しかし、これに「国民」に共通する精神を直ちに認めているのである。例えば、武田祐吉は「賀陸奥国出金詔書歌一首」に引かれた大伴氏の言立て

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ 顧みはせじ

を次のように捉える。

…茲には偶々大伴氏の祖先の歌として伝はつて居るけれども、我が国民の祖先の歌だと云ふことも出来る。軍事を以て奉仕する人々が特にかやうな歌を歌つて奉仕したといふことは、日本国民としての精神を現して居るのである。特に此の歌一首には限らない。まだいくらもかやうな歌があつた筈である。それらは、不幸にして遺つてゐない。『萬葉精神』上巻、二〇五～二〇六頁)

保田は、武田のように、この「言立て」に表現された天皇への忠誠を、無媒介に「国民」一般に拡大解釈することはしない。保田は「言立て」を「異立て」と解釈し、平常に変わつて殊なることを言う、という意味にとる。そして、大伴氏の異立ては、家持の歌の言霊によつて国を衛る道を教える特別なものであつたと見るのである(「回想と自覚」四一八～四二二頁)。「異立て」という解釈の可否は措くが、保田の「言立て」の捉え方は、武田に比べてはるかに穩健である。

しかし、〈大君の思想〉は家持一人の中で完結するものではない。保田によれば、〈大君の思想〉は、「忠」ではなく、家持の心の中の根源的な「生命の原理」である(『萬葉集と家持』一七頁)。その内容は、「大君に結ばれるいのちを生きる」ことで、「日本民族」の人倫(「ますらを」についての説明。「回想と自覚」三八五頁)、あるいは「當時の一般国民各層のもつた大君の觀念」(『萬葉集と家持』一六頁)を

最高度の形で表したものである。保田の〈大君の思想〉も、最終的には武田同様に「国民精神」に帰着するのである。

## 六 生きるための〈思想〉

(5) 『萬葉集』を考察する目的は、危機の日を生きる我々の〈道〉をつよくすることにある。

保田『萬葉集の精神』には、「終末の意識」(風巻景次郎<sup>41)</sup>、「末世の意識」(塚本康彦<sup>42)</sup>)が指摘されている。また、保田の〈思想〉全般の特徴を表現するのに「敗北」という言葉も使われる<sup>43)</sup>。ところが、『萬葉集の精神』には「終末」「敗退」「敗北」の語は少ない。

壬申の乱に対する慟哭が、人麻呂によつて決定された詩となつたやうに、天平の詩形は各地帝都の荒廢に対する哀歌に起り、家持の回想と自覚によつて、憶良が神ながら文化の精神から感慨したものが、終末的熱情に転回した。(「回想と自覚」三六六頁)。

確かにこのように家持の終末の意識や敗北を、保田は述べている。ところが、前節の要点(4)で見た家持の心の中の「生命の原理」を始め、保田は「いのち」や「永遠の生命」についてしばしば言及する。改めて『萬葉集の精神』を見渡すと、危機の中で、『萬葉集』の

詩人たちがなおも希望を持っていたことを記す文章が目を引く。

⑦……我々は如何なる驚くべき事実のまへにも屈しなかった人々の、しかも日本の国民としてつくりあげた、神ながらに結ばれる精神の生理とその論理を古典の中にたづね、それを己の創造文学の思想とせねばならないと思ふ。（言霊の風雅 一九七頁）

①……萬葉集の精神の成立といふ点でも、家持の精神の完成期の火花を感じさせる点でも、橘氏の大獄を中心とする時代への慷慨を、国ぶりの慟哭に歌ひあげたときに、もう萬葉集の精神は、偉大なる敗北を了知した上に成立してゐたのである。（中略）萬葉集の精神は、描かれた範囲で云ふとき、湊川に到らず桜井駅垂訓で終つたものである。家持は最後に於て、わが道をうける子らに、永遠の祈願を映し、泣きつゝも希望にみちたことばを與へたのである。（回想と自覚 五三五頁）

危機的状況にも屈しなかった人々、敗北を了知していながらも、完全に敗北する前で、子孫に希望に満ちた言葉を与えた家持を称揚するのである。「未曾有の時代」であっても、「歴史の精神」を護ることが生きる支えとなることを、保田は『萬葉集』を通じて伝えようとしたのであろう。

しかし、保田は詩人の立場にあくまでも踏み止まることも主張し、危機的状況を打開するために行動を起こすことを否定した。それゆえ、生きるための〈思想〉であつたはずの保田の主張は、困難な状

況をどこまでも受け容れ、〈歴史の精神〉を胸に抱きながら、永遠なるものに繋がる、〈死〉を思ふ信仰に転化する性質も持っていた。

『萬葉集の精神』が、初出稿から一部の「書物」として組織化が図られていた、一九四二年（昭和十七）三月に執筆された「醜ノ論」<sup>(4)</sup>には、その〈死〉をさらに具体的に意味付けるような文章がある。

デカダンの究極に於ては、必ず神が統治されるが、そこまでゆかない人為のデカダンは、時代の憂ひとなるのである。この何が何でもの標語には絶望を恐れてゐるところがあるが、日本の古の道を信ずる者は、決して絶望を怖れる必要がない。絶望といふのは、すべて人為の智識のものである。我国では絶望するなど教へる必要はない。却つて絶望せよと教へうるのである。一般に東洋の絶望は、ものの終りでなく、ものの創造の初めであつた。

人為を排した絶望の果てには、〈創造〉の始まりが待っていた。<sup>(4)(5)</sup>

\*保田與重郎の文章の引用に際しては、原則として漢字を旧字体から新字体に改めた。

\*『保田與重郎全集』（講談社、一九八五～一九八九）は、『全集』と略称した。

\*本稿で触れることのできなかった、『萬葉集の精神』における、①外来文明と固有文明の葛藤、②独自の〈草莽〉と〈民族〉の概念

(中河與一の〈民族〉との違いも視野に入れた)、③当時の萬葉集受容とは大きく異なる防人歌観、④「人為」(あるいは自力)を排する(大君の思想)の思想的地位などの問題については、別稿で改めて論じたい。

## 注

- (1) 小川靖彦『萬葉精神』をめぐって―戦争下の久松潜一・武田祐吉の萬葉論〈戦争と萬葉集〉―『万葉をヨム―「方法論」の過去・現在・未来―』笠間書院、二〇一八刊行予定。
- (2) 小松(小川)靖彦「浪曼主義」と『萬葉集』―中河與一『萬葉の精神』をめぐって〈戦争と萬葉集〉―『繡』第29号、二〇一七・三。
- (3) 竹内好「旅日記抄四」『中国文学』第89号、一九四二・一一。
- (4) 『萬葉集の精神』に対する文壇の反応については、神谷忠孝『萬葉集の精神』(保田与重郎著)をめぐって(大久保正編『万葉とその伝統』桜楓社、一九八〇)参照。
- (5) 「学歴貴族」の用語は、竹内洋『日本の近代12「学歴貴族の栄光と挫折」(中央公論新社、一九九九)に拠る。
- (6) 戦後、保田与重郎の最大の批判者となる政治思想研究者・橋川文三は青年時代を振り返って、「そのころとしては高価だった『万葉集の精神』などもひどく衝撃を受けた本である」と述べて

いる(「ロマン派へ接近の頃」『橋川文三著作集』1、筑摩書房、一九八五。初出『「日本浪曼派研究」第2号、一九六七・七)。

(7) 大岡信「保田与重郎論ノート」『抒情の批判 日本的美意識の構造詩論』晶文社、一九六一、川村二郎「保田与重郎論」『展望』第93号、一九六六・九。

- (8) 神谷忠孝「昭和十年代の転換」『保田与重郎論』雁書館、一九七九、水上勲「保田与重郎の初期古典論をめぐって」(『日本近代文学』第32集、一九八五・五)など。
- (9) 北山茂夫「万葉の精神」『文学』第26巻第4号、一九五八・四。後に『万葉の創造的精神』(青木書店、一九六〇)所収。
- (10) 風巻景次郎「保田与重郎氏著『萬葉集の精神』」『国語と国文学』第19巻第12号、一九四二・一二。後に『風巻景次郎全集』第1巻(日本文学史の方法)(桜楓社、一九六九)所収。
- (11) 吉澤義則「大伴家持」『萬葉集講座』第一巻(作者研究篇)(春陽堂、一九三三・二)、佐佐木信綱「大伴旅人 大伴家持」(歴代歌人研究、厚生閣、一九三九・五)など。
- (12) 北山注(9)論文が、固有文明と外来文明の対立という保田の主張をしつかりと押さえていたことに注目したい。北山はそれを「歴史ばなれ」と批判した。
- (13) 一九四四年頃、陸軍報道部と情報局文藝課の懇談会で、松村報道部長が文藝課長の井上司郎に言った言葉。井上は陸軍報道部

に巢喰う評論家の一人が保田の著書、特に『萬葉集の精神』を「鋭くよみとつての情報」と思った（井上「ますらをにして詩人、そして予言者―保田與重郎君の思い出」谷崎昭男他『私の保田與重郎』新学社、二〇一〇）。

(14) 山城むつみ「萬葉集の『精神』について」『文学のプログラム』講談社文芸文庫、講談社、二〇〇九、二〇一五（第三刷）。

(15) 奥出健が、日本浪漫派の『萬葉集』に関する文章を年代順に整理している（『日本浪漫派の萬葉観』大久保編注（4）書。この時期に保田が精力的に萬葉論を執筆していたことがわかる）。

(16) 保田「皇紀二千六百年の紀元節」『風景と歴史』天理時報社、一九四二・九。『全集』第十五卷。

(17) 保田「紀元二千六百年」『コギト』第百三号（一九四一・一）の編輯後記。初収『環境と批評』協力出版社、一九四一・一一。『全集』第十二卷。

(18) 保田「新体制と文学者」（初出未詳、一九四〇・一〇）、「浪花節と文学者」（初出未詳、一九四〇・一二）、「学問のすゝめ」（初出『東京日日新聞』一九四〇年一月十一日付）など。いずれも『環境と批評』（注（17））『全集』第十二卷。なお、河田和子は、新体制運動の一貫としての翼賛文化運動に対するものとして、保田が「国学の再建」による《文藝復興》＝「文化維新」を説き、『萬葉集の精神』をまとめたと捉えている（『戦時下の文

学と（日本的なもの）―横光利一と保田與重郎―』第九章・国学の再建による《文藝復興》と国民文化運動、花書院、二〇〇九）。

(19) 保田「コギト百号後記」『コギト』第百号、一九四〇・一〇（初収『環境と批評』（注（17））『全集』第十二卷）。

(20) 保田「正倉院御物を拝観して」（『河北新報』一九四〇年十一月十五日、十六日、十七日付。初収『環境と批評』（注（17））『全集』第十二卷）に見える用語。皇紀二千六百年奉祝のために、東京帝室博物館での正倉院御物の展示の観覧も、保田に強い感動を与えており、『萬葉集の精神』執筆の契機となっている。

(21) 河田注（18）書、第九章・国学の再建による《文藝復興》と国民文化運動（特に二二五―二六頁、注14）。

(22) 例えば、ジャーナリストの永淵一郎は「アララギ風文藝観になじんでいた私は、本当に目から鱗の落ちるおもしろい」と言う（永淵「来よとつげむ」谷崎ほか注（13）書）。

(23) 『萬葉集古義』の戦前から普及している広谷国書刊行会本（一九二八年昭和版）では、「皇神の道義をあきらめ」となっている。また、「所見」にも「コ、ロ」とルビがある。

(24) 五味智英「雅澄に於ける言霊の風雅」『国語と国文学』第22巻第1号、一九四五・一。なお、雅澄の「皇神の道義」と「言霊の風雅」についての研究史については、榊原忠彦「鹿持雅澄の『皇神の道義』と『言霊の風雅』―その出会いと資料に関する私記―」

『日本文学研究（高知日本文学会）』第32号、一九九五・三）参照。

(25) 北山注（9）論文。

(26) 河田注（18）書、第八章・言霊論と「神人一如」、第九章・国学の再建による『文芸復興』と国民文化運動。なお、久松はこの考えを、『萬葉集考説』の初版本（栗田書店、一九二五・二）の「近世国学と萬葉集の言語性・文学性・民族性」で発表している。久松は、「皇神の道義」に強く雄々しい古道、「言霊の風雅」に弱々しい文学を対応させており、保田の考え方とは異なる。

(27) 五味注（24）論文。

(28) 久松潜一『萬葉集考説』第四編一・萬葉集の文化史的意義、栗田書店、一九四二・一（増補改訂、一九四二・二（五版））。

(29) 河田和子「保田與重郎の英雄論―古典への回帰と日本の『血統』―」（『論潮』7号、二〇一四・七、水上注（8）論文など）。

(30) 河田注（18）書、第九章・国学の再建による『文芸復興』と国民文化運動。

(31) なお、山城むつみは、保田の「言霊の風雅」に、「皇神の道義」が現れるのは、戦争を切迫して意識する時であるとして（『萬葉集の『精神』について』（注（14）書）、「皇神の道義」と「言霊の風雅」を別々に動くものと捉えている。確かに保田は、家持の青年時代の相聞歌を論じる時には、「言霊の風雅」を単独で用

いている。しかし、「古典時代に於ける言霊の風雅のあらはれ方は、神のものが神のまに／＼顕現したといふべきである」（『青年』二五九頁）の「神」は、引用した「回想と自覚」（三九二頁）の「神」と同じである。保田の、「創造」をもたらずものとしての「神」の概念は、「君臣の大義」と一致する場合と、家持の相聞歌の場合のように直接的関係が薄いように見える場合とがある。

「神」の概念を緩やかにすることで、『萬葉集の精神』以前から保田が重視してきた、王朝の美的世界の端緒である家持のサロンを（『萬葉精神の再吟味―古典復興の現代的意味―』（『京都帝国大学新聞』第264号、一九三七年六月二十日付。『全集』第五卷）、『萬葉集の鑑賞』（『新潮』第36巻第12号、一九三九・一二。『全集』第七卷）、新たな論理の中に取り込もうとしたと思われる。

但し、山城が「皇神の道義」を危機と結び付けたのは重要である。

(32) 書誌情報は注（31）参照。

(33) 書誌情報は注（31）参照。

(34) 保田「百人一首」『短歌文学講座』第三巻（鑑賞篇）、三笠書房、一九四〇・一二。初収『百人一首概説』『民族と文藝』ぐろりあ・そさえて、一九四一・九。『全集』第八巻（「」の本文）。

(35) Kakuzo Okakura. *The Awakening of Japan*. New York: Japan Society, Inc., 1921.

(36) 最初の全集である『岡倉天心全集』天（第一巻）（聖文閣、

一九三五・一二)所収の福田久道・荒井甲子三郎訳「日本の覚醒」、

および村岡博訳岩波文庫本『日本の目覚め』(一九四〇・七)では「歴史的精神」(但し、福田・荒井訳では1箇所「歴史的精神」)。なお、近時の斎藤美津訳「日本の目覚め」(ちくま学芸文

庫本『茶の本 日本の目覚め 東洋の目覚め』二〇一二)では「歴史精神」。なお、保田は「明治の精神——二人の世界人——」(『文藝』

第5巻第2号、一九三七・二。初収)「明治の精神」中の「二人

の世界人」(『戴冠詩人の御一人者』東京堂、一九三八・九。『全集』

第五巻)で、書名は挙げずに天心の著書の趣旨を紹介し、「岡倉天心のこと」(『新日本』第1巻第2号、一九三八・二。『全集』

第五巻)に「日本の自覚」という書名を記す。但し、両文章とも「歴史的精神」、およびこれに類する語は用いられていない。

(37) 保田『萬葉集名歌選釈』新学社教友館、一九七五。『全集』第三十四巻。

(38) 但し、「今日の維新思想は主として建国のなほ遠い神勅の日へとそれ(引用注、復古すべきもの)をさらに仮定したやうである」(「言霊の風雅」一一四頁)と、1箇所「神勅」に触れた所がある。

(39) 「永遠にしてしかも瞬間であった」の読解については、「瞬間の切迫」(「木曾冠者」)についての奥出健の論(「保田与重郎論——浪漫と戦争——」『国文学』第21巻第1号、一九七六・一)を参

考にした。

(40) 武田祐吉『萬葉精神』上巻、湯川弘文社、一九四三・七。

(41) 風巻注(10)書評。

(42) 塚本康彦「保田与重郎の文学と古典」『国語と国文学』第38巻第11号、一九六一・一一。

(43) 阿部正路「保田与重郎論序説」(『國學院雑誌』第85巻第7号、一九八二・七)など。

(44) 保田「醜ノ論」は『機織る少女』(萬里閣、一九四三・九)の本文に拠る。初出『コギト』第11巻第4号、一九四二・四。

(45) 吉田満『戦艦大和ノ最期』(講談社文芸文庫、講談社、一九九四)の、沖繩への水上特攻に向かう途次、士官たちが作戦の成否について議論する場面での哨戒長白淵大尉の「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ 負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ/日本ハ進歩トイウコトヲ輕シジ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、本当ノ進歩ヲ忘レテイタ 敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ 今目覚メズシテイツ救ワレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望ジャナイカ」という発言とこの考え方は響き合う。実際この発言があったかは元「大和」乗組員から疑問視されているが、吉田が特攻を自分に納得させる論理であったことは確かであろう。

(こまつ「おがわ」・やすひこ/本学教授)